最近のドイツ語教育の現状と初級文法教科書の在り方について

内 村 国 臣

〈目　次〉

序
1　一般教育課程ドイツ語教育の現状
2　初級ドイツ語文法教科書の出版の現状
3　二極化傾向における初級文法教科書
4　いわゆる「ロング・ベストセラー」教科書の特徴
1)　発行版数，ページ数と課
2)　文法項目の取捨選択
3)　文法項目の配列順序
4)　「ロング・ベストセラー」教科書の特徴
5　「初級文法教科書」編纂に必要な視点
6　おわりに

序

One man can lead a horse to water, but ten cannot make him drink. 今日，わが国の大学には「水を飲みたがらない馬」がたくさんいる。第二外国語においては一層顕著であり，自由選択制であれば一層その度合いはひどくなる。60年代後半の学園紛争の余波を受けた大学改革の中で，全国の私立大学のかなりの大学で第二外国語の選択制が導入された。その背景には，「1か国語の修得に力を注いだほうがいいといういわば消極論と，2か国語を選ぶか否かは学生の自主性にまかせるという建前論があった[(1)]」。そのため，ドイツ語の履修学生数にそれほど変化が見られなかった大学はわずかで，かなりの大学で長期的な減少傾向が見られたのである。

もとより，このような「低落傾向」にたいして現場のドイツ語教師が手をこまねいて傍観していたわけではない。日本独文学会ドイツ語教育部会，ドイツ語教育問題研究会をはじめ多くの地域の研究会で，大学におけるドイツ語「教育の理念」，「文法の諸問題」，「教授法」，「異文化論」，「文献」等について真摯でかつ地道な研究努力がなされてきたことは，『ドイツ語教育部会会報』（以下，『会報』と略す」）の1号（1971年）から今日までのナンバーに発表されている研究論文や報告の量が如実に物語っている。また，日本独文学会編集・発行の『ドイツ文学』の50号（1973年）以降81号までのうち20のナンバーでドイツ語教育問題が論じられている。日本独文学会は，1986年秋季学会では「ドイツ語教育の今日的問題」というテーマで，1988年春季学会では「ドイツ語教育の将来を考える」というテーマで「特別シンポジウム」を開催した。

このような研究努力の中で，ドイツ語教育の改善努力の一環として，「初級文法」では「何をどのように教えるか」についても研究が行なわれてきた[(2)]。そこでは，「初級文法教科書」の在り方についても論じられている。年間比較的多数の「初級文法教科書」が出版されている。教科書は，著者の研究の成果と長年の教育現場での教授法の経験を収斂させたものであり，またいかなる学生を対象に，何を，いつ，どの程度，どのように教えたらいいかが示されているとい

えよう．

本稿では，近年第二外国語の衰退傾向と，選択制の導入，授業時間数と学生数の減少という一般的な傾向の中で，まずドイツ語教育の現状を把握し，そして最近5，6年間に出版された「初級文法」教科書の傾向と，特にロングセラー，ベストセラーとなっている教科書，新しい工夫，試みをしている教科書を選び，文法項目の取捨選択と配列順序を中心にその実態と傾向を探ってみた．

1　一般教育課程ドイツ語教育の現状

日本独文学会は，1987年前期において「一般教育課程ドイツ語教育現状調査」を実施し，その結果を1988年の春季学会で発表した．ここで取り上げたデータは，その調査結果の一部である．

調査対象：一般教育課程ドイツ語　1987年度（前期）

調査対象大学：国公私立49大学206学部（アンケート発送大学：アトランダムに50校選出，回収率98%）

1)　平均的なクラスサイズ

10 ～ 14	0	55 ～ 59	4	平均：49人	
15 ～ 19	0	60 ～ 64	5		
20 ～ 24	2	65 ～ 69	2		
25 ～ 29	0	70 ～ 74	0		
30 ～ 34	0	75 ～ 79	0		
35 ～ 39	2	80 ～ 84	2		
40 ～ 44	12	85 ～ 89	0		
45 ～ 49	4	90 ～ 94	0		
50 ～ 54	17	95 ～ 100	0		

2)　過去5年間のドイツ語履修者数の変化

（殆ど）変化なし	30大学	少し減少	14
大きく増加	1	回答なし	1
少し増加	5		53

大きく減少　　2　　(49大学＋4学部)

3)　学部（コース）別，学期別のドイツ語履修の必修単位数（カッコ内の数字は自由選択の単位数）

1．**(表1)** 履修する単位数

a．第2外国語

タイプ	1年		2年		学部数
	前	後	前	後	
A	1	1	1	1	2
B	2		2		5
C	2	2	0	0	9
D	2	2	1	1	3
E	2	2	2	0	9
F	2	2	2	2	29
G	3		0	0	3
H	3		2	0	1
I	4		2	0	4
J	4		0	(2)	9
K	4		2	2	7
L	4		2_x	2_y	1
M	4		4		89
N	4		6		1
O	3	2	2	2	9
P	6		2		6
Q	6		2	(2)	1
R	8		0	0	1
S	8/3		—	—	8

b．第1外国語

タイプ	1年		2年		学部数
	前	後	前	後	
A	2	2	1	1	1
B	2	2	2	2	23
C	2	3	2	1	1
D	2	3	3	0	6
E	4		2		5
F	4		4		22
G	6		4		1
H	8		4		1
I	8/3		—		7
J	10		10		4
K	12		12		2
L	14		14		1

(2_x 2_yは「2年と3年で履修」)
(8/3は3つの学期で8単位履修)

単位認定は学期ごとのものと通年制がある。4単位，6単位，8単位，10単位などを認めるほか，学期内の単位配分も大学によって異なっている。

2．過去5年間における変化

a．変化なし　　189　学部

b．必修→自由選択　　4　(教，水産)

c．必修→一部選択　　7　(畜産，医，歯，商，文，理，工)

d．選択→必修　　4　(教，商，文，法)

＊　X大学の畜産学部では49年度よりドイツ語8単位が6単位に，Y大学医

学・歯学部では62年度から10単位が8単位に削減され，Z大学の理学部では62年より独8，英4が，独英から8単位，工学部は61年度より独8，英4から独4，英8に変わった．

3．必修単位の削減または自由選択制への移行が議論になっているか．

a．はい	13	大学（26.5%）
b．いいえ	30	（61.2%）
c．回答なし	6	（12.2%）

4．近い将来，自由選択制への移行の可能性を感じますか．

a．強く感じる	5	（10.2%）
b．やや感じる	14	（28.6%）
c．感じない	26	（53.0%）
d．回答なし	4	（ 8.2%）

上記の調査数値は，次のことを明らかにしている．

① 一クラスの学生数は，最小20〜24，最大80〜84，平均49名であること，

② 過去5年間に30.2%の大学でドイツ語履修生の減少がみられること，

③ 最大10（1学部），最小3単位（3学部），72.1%の学部（142学部）で，1，2年次ないし3年次で8単位を必修単位としていること，

④ 5.4%の学部で過去5年間に必修から自由選択ないし一部選択に変わり，26.5%の大学で必修単位の削減または自由選択制への移行が議論になっており，38.8%の大学の教員が近い将来の自由選択制への移行の可能性を感じていること．

この調査対象の49大学のうち28校が国立であることを考慮に入れると，弱小私立大学では自由選択制で，かつ単位，授業時間数も少なく，その現状はより悲惨なものであろうと推測される[(3)]．独文学会の一部には，このような現状を容認し，「健全な規模縮小（Sich-Gesundschrumpfen）」を主張する者[(4)]もあるが，大方の意見は，「ドイツ語を必修から外す，すなわち第二外国語を選択に委ねる……．この選択制によって学生数は減少し，教員数はそのままで，現状よりも小さなクラスをもつことで，よりインテンシヴな授業が可能となろう」と言う意見に否定的である．そうなれば，ますます「水を飲みたがらない馬」の増産

と，ひいてはドイツ語教育の自滅につながるのではなかろうか。

2　初級ドイツ語文法教科書の出版の現状

表2　初級文法教科書の出版の現状

年度	総発行点数		新　刊　書		
	合計	文法	総点数	初級文法書	本文平均頁数
1977	2418	298	128	30	77
1988	2872	457	97	30	76
1990	2517	394	114	24	75

(注)

1．数値は，ドイツ語教科書協会所属の9社の教科書について調査したものであるが，1977年，1988年については，岸佳子「編集の現場からみた教科書」『会報』33号(1988) の調査数値を参考にした．

2．1990年度の数値には，1990年度から南江堂がドイツ語教科書出版から撤退し，出版カタログも発行されなかったため，数値は残り8社（朝日出版社，郁文堂，芸林書房，三修社，第三書房，同学社，東洋出版社，白水社）のものである．

3．1990年度の新刊「初級文法書」の減少は，2の原因と「初級文法読本」の出版が1988年の29点に対し35点と増加したことによるものと思われる．

表2の数値から明らかなことは，「ドイツ語」の「危機状況」が盛んに言われている割には，出版の現状にはそれほど顕著な変化は認められない。平均ページ数にもごくわずかな減少傾向が見られる程度であるが，個々の教科書を検討するとページ数では100以上のもの，50〜60ページのものと二極化傾向が見られる。

3　二極化傾向における初級文法教科書

初級文法教科書の二極化傾向の背景には，授業時間数の減少，予習も復習もしない「水を飲みたがらない馬」がたくさんいることを反映して，1年間で終えることのできる簡略化された教科書の需要が高いこと[(5)]を一方に，他方に「簡略化」に反発する者があることである。初級文法教科書は，それ自体，著者がいかなる教育条件（必修，自由選択，授業時間数の多寡，学生のレベル等）の学生を念頭に置いて作成したものであるかを示している。以下，二極化傾向にある教科書のいくつかを例に取り上げ，その特徴を探ってみよう。

3.1. 簡略化された教科書

「簡略化された教科書」とは，ここでは初級文法の基本の説明を重視し，本文60ページ以下に簡略化してまとめたものを言う．

a．小塩　節『簡明ドイツ文法』〔改訂版〕1987年2月改訂第1版発行，三修社

この教科書は，文法項目を本文わずか36ページ（発音編をも含む）の15課に配分した，おそらく最も簡略化したものであろう．2，3，5，6，11課は，説明を1ページにまとめ，15課の接続法の2.2ページのスペースを除いて，他の課は1.2〜1.5ページにまとめて，各課の練習問題は，独文和訳5問，和文独訳3問に統一している．第1課の「動詞(1)」では，人称変化の口調上の特例については，-eのみに留め，第6課の「前置詞」では，前置詞と定冠詞の融合形，前置詞と人称代名詞との融合形はカットされ，第14課の「受動態・zu不定詞」では，「現在」と「過去」の二時制の説明に留め，「自動詞の受動」は取り上げられていない．その理由として，著者は「きわめて限られた授業時間数で，ドイツ語の文法を全体的に，しかも有機的に学べるように，思い切って簡潔・明快を心がけ……．これだけはぜひ必要と思われる点に集中し」（まえがき）たと述べている．同じ著者の同じ考えに基づく『見て覚えるドイツ語文法』1990年，朝日出版社発行は，同じ15課ではあるが，本文58ページで，第1課の「動詞の現在人称変化，語順」で口調上の特例には口調上の-eのみならず，語幹が-s, -ßなどに終わる動詞，不定詞が-elnに終わる動詞も取り上げている．また，前著でカットした項目，前置詞と定冠詞の融合形，前置詞と人称代名詞の融合形，話法の助動詞に準ずる動詞，副詞の比較，前置詞と関係代名詞の融合形，受動の完了形，sein + zu-不定詞，その他の受動的表現などが新たに加えられている．本書の特色は，イラストを多色刷りで豊富に入れ「視覚的にもわかりやすいページ立てにした」（まえがき）ところと，巻末（p.59〜68）の「文法用語のまとめ」で文法用語をやさしく解説しているところにある．

同著者の手による『やさしく学ぶドイツ文法』1990年4月1日発行（郁文堂）

は，前出の二著と異なって，本文62ページを19課に配分し，「限られた授業時間数であっても，基本的文法項目にはすべて当たることができるように，全体を有機的にとらえて構成し……形容詞の格変化語尾（Lekt.12），接続法（Lekt.19）の4ページを除いては，すべて各課を3ページだて」（まえがき）としたところ，「各課のあたまに重要な基本文例を挙げ，この重要表現を繰り返し読み発音することによる自然な学習効果」（まえがき）をはかっているのが特徴である。基本文例にはそれにふさわしいイラストを付し，分かりやすさ，親しみやすさを出し，学習効果を高めようとしているところは，『見ておぼえるドイツ語』の場合と同じである。

基本的な文法項目の配列については，三つの教科書では，前半の第1課から5，6課までに動詞の現在人称変化，命令形，冠詞（類）と名詞の単数・複数格変化，人称代名詞，前置詞を配し，中間に動詞の3要形，過去，未来，完了形，複合動詞，話法の助動詞を置き，最後の3課ないし5課で再帰動詞，非人称動詞，形容詞の比較，関係代名詞，受動，接続法を配列しているところが共通している。相違点は，形容詞の格変化を「中間部」の前に入れるか，「中間部」の後に入れるかにあり，『見ておぼえるドイツ文法』が前に，他の二著が後に入れている。小塩氏の場合，基本的な文法項目の配列にはLektion，ページ数の多寡に関係なく一貫性が見られる。

b．田中　敏『ドイツ文法ノート』1986年4月第一版発行，朝日出版社

この初級文法教科書は，B5判変型の本文，付録（数詞）で39ページ，18課に文法項目を配列している最も簡略化した教科書の一つである。本書の特色は，練習問題を提出できるよう別冊のとじ込み（36ページもの）にしたところ，各課とも2ページ見開きにして，変化表あるいは例文を載せただけで，説明文は全くなく，その代わり課のおしまいに空欄があって，これを学習者が埋めるようになっている要点のまとめを付けているところである。これは，「ここで文法の規則を学び，おぼえるためではなく，教授者の説明と練習問題の操作とによってすでに習得していることを，ことばで整理，確認」（はしがき）を意図したものである。本書は，「頭の体操を楽しむための最低限の約束事を理解してもらう

こと」を主眼にして，例外事項にはほとんど触れていない．「全体の進行をあらゆる点で徹底して累進的に運ぶことであった．各課を着実に順次関連させ，発展・段階的に積み重ねて，唐突，飛躍は極力避けた．既に習った文法事項を裏切るようなものは，どんな些細なことでも絶対出さないように細心の注意を払い，ドイツ文法の骨格だけを明確に示すことに努めた．変化表や例文に用いた単語もできるだけおなじものを繰り返し用い[(6)]」ている．例えば，動詞の現在人称変化表に lernen を用いれば，その例文は Peter lernt immer fleißig. で示し，話法の助動詞 Peter muß immer fleißig lernen.　現在完了形 Peter hat immer fleißig gelernt. とし，反復と統一を心掛けている点が見受けられる．また，三基本形の表でも弱変化動詞は lernen を使い，強変化動詞には sprechen を，混合変化動詞には bringen を用い，過去分詞で ge- をつけない非分離動詞の例も erlernen, entsprechen, verbringen で示し，分離動詞の三基本形の例も kennenlernen, aussprechen, beibringen で，更に zu 不定詞の例も zulernen と kennenzulernen，zu 不定句も Fremdsprachen zu lernen とし，また um-zu，ohne-zu，statt-zu の例文にもすべて Fremdsprachen zu lernen を用いるといった具合に「執拗なまでに反復と統一」，「注意が散漫になることを避け，規則だけをくっきりと浮かびあがらせ，印象づける[(7)]」ことを意図している．

著者は，このような簡略化した教科書を作るに至った背景を次のように記している．氏は，「ここで問題となっているのは，教養課程における所謂第二外国語としてのドイツ語教育であるが，教授法に関する意見の中には，論者は独文科，ドイツ語科のドイツ語教育のことを言っているのか知らんと錯覚させられるようなのをしばしば見受ける．結局それは大学におけるドイツ語教育の意義をどう理解しているかにも依ろうが，教授法を研究されている諸賢は往々にして熱心さのあまり，教授法が論議されるようになった要因，即ち大学生の大多数はドイツ語を学ぶ意味を見い出しておらず，したがって学習意欲が全くないという事情をややもすると忘れがちである」と言い，「私も，今われわれが西欧との，言葉の真の意味におけるコミュニケイションを必要としていることを痛感すること人後におちないものである．われわれは，今まで西欧に対して拝読と拝聴に終始してきたが，もはやそのような実質的な鎖国のうちに生きていく

ことは不可能になってきている。われわれが世界に向かって自分を説明することは今やわれわれの存亡をかけた課題であろう。……だからこれからの外国語の学習は，その外国語を駆使して自分を表現できるようになることを目標とすべきである。……ドイツ語のそのような学習は，ドイツ語を専門に勉強する独文科，ドイツ語科の学生にまかせておけばよいであろう。彼らこそ万難を排して，……聞く，話す，読む，書くの四つの能力を確実に身につけねばならない。……しかし同様のことを大学の教養課程のドイツ語に要求するのは現実的でない」と述べている。そして，「実利的な面から」考えてもその必要性はないし，「教養主義的な見地から」考えてみても，「大衆化された今日の大学の現状を考えると，それは高踏にすぎ」，ドイツ語を学ぶ必要性を説いてあまりに現実と遊離している[(8)]」と結論づけている。

引用が長くなったが，この文脈の中に著者の教養課程のドイツ語教育とその初級文法教科書がいかにあるべきかの哲学が窺われるのである。この点については，後でまた触れることにする。

c．橘　好碩『文法を2ページで』（改訂版）1990年4月第1版発行，朝日出版社

この教科書は，B5判変型，縦長で，本文37ページで第1課に発音編を配し，18課立てのものである。各課を見開き2ページにして，左ページを文法項目の羅列，右ページを練習問題（和訳，独訳，空欄をうめる，文を書き改める問題等全20問）にあてている。文法項目については，「変化表」と「例文」のみに留め，網かけ，2色刷り，ゴジック書体を用いて視覚的に理解させようと努めているが，初級文法の「ダイジェスト版」の体裁となっている。

著者は，この教科書編纂の趣旨を次のように記している。「……限られた時間数のなかで着実に諸君の努力が結ぶように，ドイツ文法の概要を可能な限りコンパクトな形で解説し，文法のポイントが確実に把握されることを目標に作成……。視覚的な効果を考慮し，図表を多用することにより，各文法事項をイメージ的に把握しやすいようにし……。詳細な説明をせず要点のみを記すという方法をとりましたので，ご担当の先生方が適宜用例を補われると思います……」

(はじめに).

文法項目は，基本的なものはすべて網羅しているといえる．男性弱変化名詞，人称代名詞2格，前置詞と定冠詞の融合，指示代名詞ないし人称代名詞と前置詞の融合，疑問代名詞 was と前置詞の融合，話法の助動詞に準ずる動詞，自動詞の受動，副詞の比較，関係副詞も取り上げられている．

d．田中宏幸『田中・ミニドイツ文法』1988年4月発行，郁文堂

本書は，本文56ページに「基本的な文法規則を，出来るだけ簡潔かつ簡明にまとめたもの……．その説明も最小限のものにとどめ……．原則的に左ページに規則の説明を，右ページに関連の練習問題を配し，相互の参照が便利なように配慮」(まえがき) されたものである．本書の特色は文法項目を課に分けず，1～40の項目に分けて配したところにある．

文法項目は，男性弱変化名詞がカットされているほかは，基本的な項目は一応網羅されており，人称代名詞の2格も表に提示している．

e．中村哲夫『明るいドイツ文法』1989年3月初版発行，第三書房

本書は，本文53ページと補足54～58ページからなる．第1課の「発音と単語の読み方」から15課の「接続法」まで「最小限必要な重要事項のみを提示」(まえがき)している．人称代名詞の2格はカットされているが，男性弱変化名詞，自動詞の受動，関係副詞 wo は取り上げられている．「動詞の格支配」(p.13)，「前置詞句」(p.14)，第9課の「副文・疑問詞」のところで疑問代名詞（格変化するもの）wer・was，疑問副詞 woher・wo・wohin・wie・wann，間接疑問文についてそれぞれ例文を挙げて説明している．

本書の特色は，とりわけ次の点にある．第2課の「動詞の人称変化(1)」では，語幹＋人称語尾（-e,-st,-t,-en,-t,-en）の変化についてのみ触れ，第4課「動詞の人称変化(2)；前置詞」で，

「1　動詞の人称変化(2)

(イ)　不定型の語尾が-n で終わる動詞（……略）

(ロ)　du/er に対する変化形において，幹母音が不規則に変化する動詞がい

くつかある。

a)　i 型：(略)

b)　ウムラオト型：(略)

(ハ)　語幹が，-d,-t,-chn,-ffn に終わる場合……(略)

なお，語幹が歯擦音（-s,-ss,-tz,-z など）で終わる動詞の場合……(略)」のように人称変化のさいに語幹が変わらない動詞と幹母音が変わる動詞を一緒にして説明しているところである。

f。高木　実『確かめながらドイツ文法』1989年 4 月初版，朝日出版社

「ドイツ語の基礎を理解するために最小限必要な基本的文法項目を，教授者には教えやすく，学習者には理解しやすいことを主眼に」（まえがき）編纂された本書は，全体を15課で構成し，各課を 4 ページ（練習問題 1 ページを含む）にまとめ，各文法項目のあとにやさしい練習問題をつけ，各課の終わりに Übungen を設け，各文法項目の練習問題とも関連させた動詞や名詞類などの変化の練習，和訳，独作文の問題を置いている。B 5 判変型で，本文59ページしたてで，行間を十分取り，ゆったりした感じを与えている。

本書の特色は，これ以外には第 7 課を「zu 不定句」の用法の説明にのみあてていることである。これは他の教科書に見られないところであり，著者はそれだけ「zu 不定詞の用法」を重視していることを意味している。「口調上の例外の語幹が-s,-ß などに終わる場合，-el,-er に終わる場合について触れられていない。また，関係副詞についても触れられていない。

同じ著者の手による『ドイツ文法500語』(1986年 4 月初版，朝日出版社，A 5 版）は，本文61ページを15課に分け，各課を 4 ページづつにし，左右見開き 2 ページを文法の説明に，残り 2 ページを Übungen A, Übungen B に分け，A は動詞や名詞などの変化の練習を中心にし，B はその応用編にあてている。文例，練習問題で用いられた単語は，いずれも最も重要な基本単語で，総数500語に限定したのが特色である。本書は，『確かめながらドイツ文法』で省かれている「口調上の例外」の語幹が-s,-ß などで終わる場合については，脚注ではあるが触れられている(p. 4)。-el,-er に終わる動詞，関係副詞について触れていないのは同

じである．文法項目の配列は，『ドイツ文法500語』が「接続法」を14，15課に分けて配しているところが『確かめながら……』とは異なるが，著者の場合配列に一貫性がある．それは，本文58ページ，19課仕立ての『高木・新編初級ドイツ語文法』(新訂版) 1985年4月新訂22版，郁文堂もほぼ同じ配列となっている．この教科書では，「口調上の例外」については，すべて触れられているが，「関係副詞」については他と同様触れられていない．

g．大岩信太郎『ドイツ文法12課—改訂版—』1983年初版，1989年4刷，朝日出版社

本書は，本文44ページ，全12課で「短期間にドイツ文法を習得させる」ことを目的に，「一つの課の中にあまり多くを詰め込まないように注意」(はしがき) したため，「口調上の例外」の語幹が-s,-ß などで終わる場合，人称代名詞の2格，前置詞と定冠詞・人称代名詞・was との融合，関係副詞については触れられていない．本書の特色はほかに，一般には「発音編」は一か所にまとめて練習されるところを三分し，第1課から3課の課の冒頭で発音の練習をするようにしているところである．

h．常木　実『マイルド・ドイツ文法』1988年3月初版発行，同学社
『ドイツ文法スケッチ』(改訂版) 1987年4月初版発行，朝日出版社

「ドイツ文法の概要を比較的短い期間で確実に理解し身につけられるよう……文法項目を必要最小限にしぼって」編纂された『マイルド……』は，発音3ページ，本文18課を各課2～3ページにまとめ，全体で45ページからなる．「文法説明は簡明に，文例には訳文を添え，備考欄を設けたり随所に注をつけて学習者の自主的な勉学意欲に応え，……練習問題には……日常生活に関係の深い，やさしくてすなおな，しかも新しくて興味のあるものを採るよう」(まえがき) にしたものである．練習問題は，和訳7問，独訳3問のみである．

本書の特色は，他の「簡略化された文法書」と異なって，「口調上の例外，語幹が-s,-ß などに終わる動詞の場合，-el,-er に終わる動詞の場合」と「自動詞の受動」を除けば基本的な文法事項は網羅されていること，「数詞」を一つの独立し

た課(13課)で取り上げ，基数，序数，年月日，時刻について羅列していることである。前者が可能となったのは，説明用の例文を完全にカットするか，最小限に留めているからである（例えば14ページ，「前置詞の格支配」を参照)。そのため，著者の意図する「全体を通じてくせのない使いやすいコンパクトな文法教本」になっているように思われる。

旧版の判型をひと回り大きくしてB5判，2色刷りとし，全20課，45ページにまとめた『スケッチ』は，『マイルド』より1年早く出版（改訂）されたもので，したがって『マイルド』編纂の基本となっていることが全体を通して窺える。すなわち，両者とも45ページ立てであるが，『スケッチ』の方が判型がひと回り大きいので，収容量が大きいため「zu不定句」と「分詞」を独立した課にまとめ，『マイルド』より2課多くなっている。しかし，両者は，文法項目の配列順序に若干の違いが見られるくらいで，採りあげた文法項目，説明に使っている語句のほとんどが同じものとなっている。「練習問題」も『スケッチ』が和訳6問，独訳2問（『マイルド』は7問，3問）と1問ずつ少ないが，問題形式は同じである。同一の著者が，いくつかの出版社から出版した場合によく見られる，多少「目先を変えた」教科書の例である。

3.2. 100ページ以上の教科書

a。森田　茂『演習本位—実用ドイツ文法』1990年2月初版発行，芸林書房

本書は，本文112ページ，19課で構成している。著者は，本書を編纂した趣旨を次のように述べられている。

氏は，はじめに「近ごろ出版される文法教科書は，どうも困る点が多い。先ず第一に，先人たちが苦心惨憺して築いてきた教授用文法体系を，それらは，これでもかこれでもかと言わんばかりに木っ端微塵に砕き尽くしているかのごとくに見えるからである。そして第二に，そこまでは至らなくとも，非常に簡略化，ダイジェスト化された教科書が多いため，次年次で読み物を読む場合，それらの教科書が，参考書としては殆ど役に立たないからである。このような嘆きも第二外国語としてのドイツ語教育課程に押し寄せてきた，あるいは押し

寄せつつある嵐のなせる業にその端を発しているものであって，教科書執筆者の負うべき責任ではないのかもしれない．一年間しかドイツ語を履修しないカリキュラムもあろうし，会話ができるようにすることこそ，外国語教育の真髄，とする哲学もあろう．」（まえがき）と述べられ，この教科書を編んだ眼目が，原書を読めるようにすること，作文力を養うようにすること，次年次に参考書としても十分に役立つこと，を挙げられている．本書は，100ページ以上の「重厚な」教科書に共通しているように，重要な文法事項はたいてい網羅されており，また「重要な文法事項にはかなり詳細な説明が加えて」あるので，「参考書」としての利用に十分耐えられるものである．むしろ，「教科書」と言うよりも「参考書」と言ったほうが適切であろう．

なお，練習問題は，「演習本位」のタイトルどおり，A，B，C，Dに分け，和訳20問，独作文10問をはじめ空欄を埋める文法の練習問題，文章を書き改める問題等（15問以上）非常に大量である．

b．安井啓雄『演習中心のドイツ文法』1984年初版，1988年3版，第三書房

本書は，本文130ページを20課に配し，「演習本位のドイツ文法教科書としてまとめ」られている．「練習問題を普通の教科書よりも多くし，復習問題も多数配置した」ことが特色である．練習問題は，A，B，C，D，Eに分けられ，30問が用意されている．

c．木藤／平高『コミュニケーションの文法』1987年第1版発行，朝日出版社

「従来の形式のみを詰め込む文法書では，ドイツ語の能力を身につけさせるどころか，学生に興味や関心を起こさせることすらほとんど不可能」（はしがき）と考え，形式文法を補う「文化の文法」を不可欠と見なし，本文103ページ，16課の各課の文法説明，練習問題の後に「文化の文法」というページを設け，学生の興味，関心を起こさせようと異文化への橋渡しを試みている．これが本書の特色である．「文化の文法」は，「決まり文句(1)—挨拶表現」，「所有表現と存在表現」，「決まり文句(2)—お礼」，「ノンヴァーバルコミュニケーション(1)」，「あ

いづち」,「食事と飲み物」,「語彙の相違(1)」,「スル的言語とナル的言語」,「ノンヴァーバルコミュニケーション(2)」,「決まり文句(3)」,「主語の省略は可能か？」,「視点の相違」,「受身の型」,「語彙の相違(2)―イメージの違い」,「個人と集団」,「言葉への依存／真意は沈黙のうちに」,「翻訳」からなっている。各課には，２～４枚のカラーないしモノクロの写真を配している。「文化の文法」と「写真」で30ページ以上使っている。第７課では，結合価（Valenz）について１ページ以上さいて説明がなされているが，前後関係を考えると，きわめて唐突の印象を拭いきれないし，ドイツ語文法の初学者に「原子価の数」で解説してみせるのはかえって混乱を招くように思われるのだが。

d．高辻／小岸『フィードバック　ドイツ文法』1987年初版発行，朝日出版社

本書は，本文106ページ，15課で構成されている。本書は，「ちょっと欲張りなドイツ文法の教科書です。ドイツ文法を限られた時間内で，しかも大勢の学生諸君に向かって教えなければならないという条件から，教科書が最近とみに縮小を余儀なくされている傾向にありますが，そのことを十分承知したうえで本書は，どうしたら学生諸君により充実したドイツ文法の学習をしてもらえるかを模索してみました。……そこで通常は基本例文が一つのところを二つにし，更に３課ないし４課ごとに読み物（Feedback-Übungen）を挿入」（まえがき）しているところが特色である。

e．清水健次『２倍のドイツ文法』1988年４月初版発行，朝日出版社

本書は，本文111ページからなり，工夫，特色の多い教科書である。「２倍のドイツ文法」と称するとおり，本書は二つの部分から構成されており，第一部(73ページ）では「その分量が限定され，ドイツ語の最少の必要な文法が分かり易く整理され，……未習の文法事項を含まない文例を使って説明」,「したがって，第一部は，ドイツ語の最少の必要な文法が学習できる，簡潔・平明な，癖のない，使いやすい文法書」である。第二部は，「ドイツ語文法を学ぶ時間数の多い学生諸君の一層の理解と習熟のため」と「ドイツ語のいろいろな書物を読

む場合に参考にできるものであること」を意図し，講読用の参考書，詳細な文法が学習できる文法書を目指している．

「第二部」では，「第一部」で取り上げなかった文法事項で「最少の必要な文法」にあたらない事項と，「第一部」での説明を量的に補完しているものと内容的に深めたものがある．しかし，「量的補完」については，単なる「繰り返し」になってしまうおそれもあり，その必要性があるのかは甚だ疑問である．例えば，「第二部」の Lektion 2「冠詞・冠詞類」，Lektion 3「名詞」，Lektion 6「動詞の現在(2)」「不定代名詞」，Lektion 7「形容詞の名詞化」，「形容詞の比較変化」①，③，④，Lektion 8 複合時称，Lektion 10「非人称動詞」，Lektion 11「話法の助動詞に準ずる動詞」の項目は，「第一部」で取り上げた例や例文と異なる例や例文を取り上げ，量的に増やして構成されているが，「文法学習には復習が肝要」という考えを否定するものではないが，冗長の感は避けられない．「第一部」で取り上げなかった文法事項で「第二部」に取り上げられているものは次のとおりである．

Lektion 1　§1 -n で終わる動詞（例 tun）の人称変化，§2 口調上変則的に変化する動詞（第2部-2）

Lektion 3　§3 名詞の特殊変化（Name, Herr, Herz）

Lektion 4　§1 特殊な前置詞（後置されるもの，ほか），§2 人称代名詞の2格の用法

Lektion 5　§1 動詞の3基本形

1）〈口調上の-e〉を入れる動詞

2）過去分子に ge-をつけない動詞-eien に終わる動詞

§2 動詞の過去人称変化

1）①過去基本形が-d, -t に終わる強変化動詞は，ihr で〈口調上の-e〉を入れて ihr-et となる．

②過去基本形が-s, -chs, -ß, -z に終わる強変化動詞は，du-est となる．

2）特殊不規則動詞 sein, haben, werden, tun の3基本形と過去人称変化

Lektion 6 §3 疑問代名詞 welcher

§4 不定代名詞 etwas, nichts の格変化

Lektion 7 §1 形容詞の格変化

④-el, -er, -en で終わる形容詞

⑤-e に終わる形容詞の格変化

⑥ hoch

⑦都市名や地名は語尾-er をつけて形容詞として用いられる。

§3 形容詞の比較

1）比較変化

② a）現在分子（-(e)nd に終わる現在分詞）および〈-t〉に終わる過去分詞が形容詞として用いられる場合は，その形容詞は最高級で〈口調の-e-〉を入れずに，-st だけをつける。原級 reizend，比較級 reizender，最高級 reizendst

b）また，-isch に終わる多綴りの形容詞も最高級で〈口調の-e-〉を入れずに，-st だけをつける。

③ -el, -er に終わる形容詞の比較級

⑤ mehr(weniger)～als～

2）比較級・最高級の用法（絶対的用法）

§4 副詞の比較（bald, gern, oft, sehr, wohl の変化，絶対的用法）

Lektion 9 複合動詞

§1 非分離動詞（miß-を前つづりとする動詞）

§2 分離・非分離動詞の前つづりのもつ空間的，具体的な意味の場合と，比喩的，抽象的意味をもつ場合

Lektion 10 再帰動詞

§1 再帰代名詞

1）①再帰代名詞の2格

2）再帰代名詞の注意すべき用法（相互代名詞，「所有の3格」，「利害の3格」，「強意の3格」，4格の再帰代名詞が結果を表わす形容詞あるいは前置詞句を伴う場合，再帰代名詞が主語に関係しない

場合)

§3 非人称動詞

2) es の特殊な用法(文法上の主語の es，前の語，句，文意をうける es，紹介・説明の es)

§4 分詞（現在分詞の分詞構文，過去分詞の分詞構文・絶対的用法・命令法の代用)

Lektion 11 §2 数詞（年月日，分数，小数，時刻)

Lektion 12 関係代名詞・指示代名詞

定関係代名詞 welcher，先行詞が人称代名詞の場合，定関係代名詞と前置詞の融合形，定関係代名詞の先行詞としての予示的 es（説明・紹介の es)，〈wie＋人称代名詞（1格または4格)〉，関係副詞，指示代名詞と前置詞の融合形，紹介・説明の das, dieses, jenes, derjenige と derselbe の格変化

Lektion 13 受動・不定詞

話法の助動詞の入った受動態，能動態による受動的表現（sein, bleiben, geben＋他動詞の zu をもつ不定詞，他動詞＋不定詞，lassen＋sich＋他動詞の不定詞，man を主語とする文)，不定詞の種類(現在不定詞と完了不定詞)

f．在間／田畑『確実なドイツ文法』1988年4月初版発行，朝日出版社

「従来の文法教科書は，ページ数などの関係で説明を簡単にする傾向にありましたが，本書は基本的な文法事項をゆったりと説明する方針で作成しました．練習問題も，文法規則は，暗記よりも慣れが大切という考えから，対話練習も含め，たっぷりと量を増やしました．なお，別冊……は，基本的な文例を集めたものです．これも外国語の習得には一定数の単語を，できるだけ文の形で覚えるのが不可欠であるという考えに基づくものです」(はしがき)．

本書は，「基本的な文法事項」の説明のあと「さらに文法を豊かにするために」で1～2ページのスペースを取り，従来の「簡略化された教科書」でよくカットされた文法事項，例えば動詞の人称変化では「口調上の例外」を，受動態で

は「自動詞の受動」を，比較級では「絶対比較級」と「絶対最上級」を，関係文では「関係副詞」を取り上げているのは理解できるが，そのほかは例文を増やし，説明を繰り返しているのと変わらない。

本書は，本文104ページ（19課）＋補足４ページと別冊『暗唱用独文100選』からなる。

g。柴田／原『話せるドイツ語』1990年４月第１版発行，朝日出版社

本書は，「外国語の習得に当たって，いまだに〈会話か訳読か〉という二分法が語られることが多い。しかし，国際化の波が否応なく押し寄せ，人と情報の流れが頻繁になった昨今，この両者を〈あれかこれか〉の構図の中で捉えることは，もはや当を失しているのではあるまいか。むしろ，会話も，そしてまた訳読も同時にこなせて当たり前の時代となった」という認識のもとに，「話せるドイツ語」を目指している。

文法事項の構成，説明については，それほど新味，工夫が見られるわけではないが，各文法事項の説明後，簡単な練習問題を置き，当該文法事項の理解度をチェックし，さらに練習問題に２ページをさき，和訳問題，口頭練習問題，独作文問題等，本書の意図する「話すこと」を意識した練習問題が設けられている。

本書は，本文121ページ，16課からなる。

4　いわゆる「ロングセラー教科書」「ベストセラー教科書」の特徴

現在，「初級ドイツ語文法教科書」のヒットメーカーのベスト５は，大岩信太郎（13冊），小塩　節（12冊），常木　実（10冊），高木　実（９冊），福田幸夫（７冊）である。ここでは，三修社と郁文堂のベスト・ロングセラーを取り上げて，その特徴と共通点を探ってみた。

1）発行版数、ページ数と課

著　者　名	書　　名	発行年／版数	ページ	課	出版社
大岩信太郎	改訂　印象的なドイツ文法	1984年初版 1988年42版 1989年改訂 第一版発行	70	16	三修社
	英語対照ドイツ文法14時間	1989年22版	73	14	三修社
橋本文雄／大岩信太郎	改訂・橋本ドイツ文法	1975年初版 1989年28版	71	20	三修社
三室次雄／W. Schlecht	演習ドイツ文法（改訂版）	1985年初版 1988年34版 1989年改訂初版 1990年改訂13版	78	16	三修社
	ドイツ語の世界 文法編	1989年16版	71	12	三修社
在間　進	三訂現代ドイツ語文法（初級編）	1983年初版 1989年三訂20版	72	15	三修社
吾妻／長谷川／内村	ドイツ語の広場	1990年14版	71	16	三修社
常木　実	基本ドイツ文法	1987年23版	62	16	三修社
近藤／伊野／河野	新ドイツ語との出会い 一文法14課	1989年21版	93	14	三修社
大岩信太郎	ドイツ文法第一歩（三訂版）	1964年初版 1986年三訂37版	97	20	郁文堂
塩谷／川島	実践ドイツ文法（新訂版）	1979年初版 1990年新訂31版	65	18	郁文堂
常木　実	新ドイツ文法（新訂版）	1966年初版 1990年新訂64版	81	22	郁文堂
	新明快ドイツ文法	1974年初版 1988年新訂58版	71	21	郁文堂
高木　実	新編初級ドイツ語文法（新訂版）	1985年22版	58	19	郁文堂
信岡資生	ドイツのことば（文法編）	1985年初版 1990年９版	67	18	郁文堂

以上の15冊は，最低62，最高97ページ，平均73ページとなっており，大岩『ドイツ文法第一歩』A 5 変型，吾妻他『ドイツ語の広場』B 5 変型以外はすべてA 5 判である。8 冊は，巻末に「補足」ないし「付録」を設け，数詞（小数，分数，数式まで載せているものもある）やその他の文法事項（nicht の位置，es のいろいろの用法等）を扱っている。高木『新編』は，「数詞」を独立した課（19課）で扱い，分数，小数まで取り上げている。在間『現代』は，巻末には置かず，各課の練習問題の後に文法の「補足」編を設けている。これは，「中心的な文法規則が明確になるように，例外的・語彙的ヴァリエーションは，〈補足〉としてまとめ」（まえがき）たことによる。近藤他『新ドイツ語』の巻末は，8 冊の中でも特異である。79〜81ページで「独訳—語句とヒント—」を，82〜83ページで「数の読み方」，84〜93ページの「基礎単語350」で「本書に出てくる単語を中心に，身近なことがらを表現するのに用いられる基礎単語350を品詞別，グループ別」に集めてある。大岩『第一歩』は，92〜97ページで「数詞」以外に「不規則名詞」の格変化を取り上げている。

2） 文法項目の取捨選択

文法項目の取捨選択については，その対象となっているものは，動詞の現在人称変化」では，口調上の例外（語幹が-s, -ß などで終わる場合，不定詞が-eln, -ern に終わる動詞の場合），人称代名詞の 2 格，過去完了と未来完了，形容詞の比較級・最上級の絶対的用法，副詞の比較，話法の助動詞に準ずる動詞，関係副詞，自動詞の受動である。すべてを網羅しているのは，吾妻他『広場』と大岩『第一歩』のみである。三室他は『演習』で-eln, -ern と関係副詞 wo を，『世界』では-eln, -ern のみを除外しているにすぎない。橋本／大岩『橋本』は，関係副詞 wo 以外はすべて網羅している。在間『世界』は，話法の助動詞に準ずる動詞，自動詞の受動を，塩谷他『実践』は，絶対的用法を，常木は，『基本』では-eln, -ern，絶対的用法，自動詞の受動を，『新』では絶対的最上級のみを，『新明快』では，-eln, -ern と絶対的最上級を除外し，高木『新編』と信岡『ドイツ』は，絶対的用法と関係副詞 wo を除外している。それに対して，最も簡略化したのは近藤他『出会い』で，-s, -ß, -eln, -ern，話法の助動詞に準ずる動詞，過去完了と未来完了，副

詞の比較，絶対的用法，関係副詞 wo をカットし，続いて大岩『印象的』と『英語対照』は-s, -ß，話法の助動詞に準ずる動詞，関係副詞 wo をカットし，さらに前者は絶対的用法を，後者は自動詞の受動をカットしている．人称代名詞の2格については，変化表に入れず，その用法についても全く触れていないものが3冊，表に入れてはいないが，その用法について注記しているもの7冊，表に取り上げているもの6冊，その半数が例文を使ってその用法を説明している．在間『現代』は，変化表に入れず，「補足」ページでその形を示し，その用法として例文を示している．

3）　文法項目の配列順序

次に，本稿で採りあげた34冊の教科書につき文法項目の配列を図表化し，その一般的な傾向を探ってみよう．その際，集約しやすいように対象にした文法項目は基本的な項目に絞り，例えば命令法，数詞，接続詞(並列・副詞的)，定動詞の位置（正置，倒置），不定代名詞，分詞は除外した．

表の数字①～㉘は，それぞれ次の文法事項を意味する．

① 動詞の現在人称変化(1)
② 定冠詞と名詞（単数格変化）
③ 定冠詞と名詞（複数格変化）
④ 定冠詞類
⑤ 動詞の人称変化(2)
⑥ 従属接続詞（定動詞後置）
⑦ 不定冠詞と名詞
⑧ 不定冠詞類
⑨ 形容詞の格変化
⑩ 前置詞
⑪ 人称代名詞の格変化
⑫ 動詞の三基本形
⑬ 過去人称変化
⑭ 未来形
⑮ 複合動詞
⑯ 現在完了形
⑰ 過去完了
⑱ 未来完了
⑲ zu 不定詞
⑳ 形容詞の比較
㉑ 話法の助動詞
㉒ 受動態
㉓ 再帰動詞
㉔ 非人称動詞
㉕ 定関係代名詞
㉖ 不定関係代名詞
㉗ 指示代名詞
㉘ 接続法

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	⑥	⑥	②	②	②
③	⑦	⑦	⑦	③	⑦	⑦	⑦	⑦	③	④	④	⑤	②	⑦	③	③
⑦	⑤	⑤	⑧	⑦	③	⑤	④	④	④	⑤	⑦	②	③	⑪	⑦	⑦
⑤	③	③	③	④	④	⑩	⑧	⑧	⑤	⑦	⑧	③	⑦	⑤	⑤	④
④	④	④	⑪	⑧	⑧	③	⑤	⑤	⑦	⑧	③	⑦	⑧	⑩	④	⑧
⑧	⑧	⑧	⑩	⑤	⑫	⑪	⑥	③	⑧	③	⑤	④	⑤	③	⑧	⑩
⑪	⑥	⑪	⑨	⑨	⑮$^{-1}$	④	③	⑥	⑥	⑪	⑪	⑧	④	④	⑩	⑪
⑩	⑪	⑩	⑤	⑥	⑬	⑧	⑪	⑪	⑮	⑩	⑩	⑪	⑩	⑧	⑪	⑫
⑫	⑩	⑨	⑮	⑪	⑤	⑨	⑩	⑩	⑪	⑫	⑮	⑩	⑪	⑨	⑨	⑬
⑬	⑫	⑫	㉓	⑩	⑪	⑳	㉑	⑨	㉔	⑬	⑥	⑨	㉑	⑮	⑳	⑥
⑭	⑬	⑬	㉔	㉗	⑩	㉓	⑭	⑳	⑲	⑭	⑨	⑳	⑭	㉓	㉓	⑤
⑯	⑭	⑮	㉑	⑮	⑨	⑮	⑲	㉑	㉓	⑥	⑫	⑮	⑮	㉑	㉔	⑨
⑮	⑯	⑥	⑭	㉑	⑭	⑥	⑮	⑭	⑩	⑨	⑬	⑲	⑫	⑭	⑮	⑳
⑥	⑰	㉑	⑫	⑭	⑯	⑫	㉓	⑲	⑫	⑯	⑭	㉓	⑬	⑲	㉑	⑯
㉑	⑱	⑭	⑬	⑫	⑰	⑬	⑨	⑮	⑬	⑰	⑯	㉔	⑨	⑫$^{-1}$	⑭	⑰
⑨	⑮	⑯	⑯	⑬	⑥	⑭	⑫	㉓	⑯	⑱	⑰	⑫	⑯	⑬	⑲	⑭
㉓	㉑	⑰	⑰	⑯	⑮$^{-2}$	⑯	⑬	⑫	⑰	㉓	⑱	⑬	⑰	⑫$^{-2}$	⑫	⑱
㉔	⑨	㉓	㉒	⑰	㉕	⑰	⑯	⑬	⑨	㉑	㉓	⑭	⑱	⑯	⑬	⑮
㉕	㉔	㉔	⑥	⑱	㉖	⑱	⑰	⑯	⑳	⑮	㉑	⑯	㉒	㉒	⑥	㉓
㉖	㉓	⑲	㉕	㉒	㉑	㉑	⑱	⑰	⑭	⑲	⑳	⑰	㉓	⑥	⑯	㉔
⑳	㉕	⑳	⑲	㉓	㉓	㉒	⑳	㉕	⑱	㉔	㉔	⑱	㉗	㉕	⑰	㉑
㉒	㉖	㉕	④	㉔	㉒	⑲	㉒	㉖	㉑	⑳	㉕	㉑	㉕	㉖	⑱	㉕
⑲	⑳	㉖	⑳	⑳	㉔	㉕	㉕	㉒	㉕	㉕	㉗	㉒	㉖	⑳	㉒	㉖
㉘	㉗	㉗	㉘	㉕	⑳	㉖	㉖	㉘	㉗	㉗	㉖	㉕	㉔	㉘	㉕	㉗
	㉒	㉒		㉖	⑲	㉘	㉘		㉖	㉖	⑲	㉘	⑲	㉔	㉖	㉒
	⑲	㉘		⑲	㉘				㉒	㉒	㉒	㉗	⑳		㉗	⑲
	㉘			㉘					㉘	㉘	㉘	㉖	㉘		㉘	㉘

数字１～34は，次の著者と教科書（書名簡略）を表わす。

１～３小塩『簡明文法』，『見て覚える文法』，『やさしく学ぶ文法』

4	田中『文法ノート』	5	橘『２ページで』
6	田中『ミニ文法』	7	中村『明るい文法』
8	高木『確かめながら文法』	9	高木『文法500語』
10	大岩『文法12課』	11	常木『マイルド文法』
12	常木『文法スケッチ』	13	森田『実用文法』
14	安井『演習中心の文法』	15	木藤他『コミュニケーション』
16	高辻他『フィードバック』	17	清水『２倍の文法』

18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
①	①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
②	②	②	③	②	②	②	②	②	②	②	⑥	②	②	②	②	②
⑦	⑦	⑦	⑦	③	⑦	⑦	⑦	⑦	④	③	②	⑦	④	④	⑦	⑦
④	④	⑤	①	④	③	③	⑩	③	⑦	⑦	③	③	⑤	⑤	⑤	⑤
⑧	⑧	④	⑤	⑤	⑤	⑤	③	④	⑧	④	④	④	⑦	⑦	④	⑥
③	⑤	⑦	⑥	⑥	⑥	⑥	⑤	⑧	⑤	⑧	⑤	⑧	⑧	⑧	⑧	③
⑤	⑪	③	③	⑦	⑪	⑪	④	⑤	⑥	⑪	⑦	⑤	⑥	⑥	⑥	⑪
⑪	③	⑥	④	⑧	④	㉔	⑧	⑪	③	⑩	⑧	⑩	③	③	③	④
⑩	⑥	⑪	⑧	⑨	⑧	④	⑥	⑩	⑪	⑤	⑪	⑪	⑪	⑪	⑪	⑧
⑨	⑩	㉔	⑮	⑩	⑩	⑦	⑨	⑨	⑩	㉓	⑩	⑨	⑩	⑩	⑩	⑩
⑫	⑮	⑮	⑩	⑪	⑨	⑩	⑪	⑮	⑫	⑥	⑫	⑳	⑨	⑨	⑮	㉑
⑬	㉑	⑲	⑪	⑫	㉑	⑨	㉓	⑥	⑬	⑲	⑬	⑫	⑫	⑫	㉓	⑭
⑭	⑭	⑭	㉓	⑬	⑮	⑳	⑮	⑫	⑭	㉑	⑭	⑬	⑬	⑬	⑫	⑮
⑯	⑨	㉑	⑲	⑭	㉓	㉑	㉔	⑬	⑨	⑭	⑨	⑭	⑭	⑭	⑬	⑫
⑰	⑫	⑫	⑫	⑮	⑫	⑭	㉑	⑭	⑯	⑮	⑯	⑯	⑳	⑳	⑯	⑬
⑱	⑬	⑬	⑬	⑯	⑬	⑮	⑭	⑯	⑰	⑫	⑰	⑰	⑯	⑯	⑰	⑯
⑮	⑮	⑯	⑯	⑰	⑭	⑲	⑲	⑰	⑱	⑯	⑱	⑱	⑰	⑰	㉑	⑰
㉑	⑯	⑰	⑨	⑱	⑯	⑫	⑫	⑱	⑳	⑰	⑮	㉑	⑱	⑱	⑭	⑱
⑥	⑰	⑩	⑳	⑲	⑰	⑰	⑬	⑲	㉑	㉒	㉑	㉓	㉑	㉑	⑱	㉓
㉕	⑳	⑨	㉑	⑳	⑱	⑯	⑯	㉓	⑮	⑨	㉕	⑮	⑮	⑮	⑨	㉔
㉖	㉓	⑳	⑭	㉑	⑲	㉒	⑰	㉑	⑲	⑳	㉖	⑥	㉕	㉕	⑲	⑨
㉗	㉔	㉕	⑱	㉒	㉒	㉓	⑱	⑳	㉕	㉕	㉒	㉕	㉖	㉖	㉔	㉒
㉓	⑲	㉗	㉕	㉓	⑳	㉕	㉒	㉕	㉗	㉖	⑲	㉖	㉓	㉓	⑳	⑲
㉔	㉕	㉖	㉗	㉔	㉔	㉗	⑳	㉖	㉖	㉗	㉓	㉒	㉔	㉔	㉕	⑳
⑳	㉖	㉒	㉖	㉕	㉕	㉖	㉕	㉗	㉓	㉘	㉔	㉔	⑲	㉒	㉗	㉕
㉒	㉗	㉘	㉒	㉖	㉖	㉘	㉖	㉒	㉔		㉘	㉗	㉗	㉗	㉖	㉖
㉘	㉒	⑱	㉘	㉗	㉗		㉘	㉔	㉒		⑳	㉘	㉒	⑲	㉒	㉗
⑲	㉘			㉘	㉘			㉘	㉘		㉗		㉘	㉘	㉘	㉘

（注）

1．(22) 橋本／大岩『新訂・橋本』の配列順序を①～㉘とした．
2．15の12^{-1}は，過去基本形のみ，12^{-2}は過去分詞のみを意味する．
3．6の15^{-1}は，非分離動詞，15^{-2}は分離動詞を意味する．
4．教科書によっては，過去完了，未来完了等をカットしたものがある．
5．1～12の教科書は，「簡略化した教科書」で取り上げたもの，13～19は「100ページ以上の教科書」で取り上げたもの，20～34は「ロング・ベストセラー教科書」で取り上げたものである．

18	在間他『確実な文法』	19	柴田他『話せる』
20	大岩『印象的な文法』	21	大岩『英語対照』
22	橋本他『新訂・橋本』	23	三室他『演習文法』
24	三室他『世界』	25	在間『現代文法』
26	吾妻他『広場』	27	常木『基本文法』

28	近藤他『出会い』	29	大岩『文法第一歩』
30	塩谷他『実践文法』	31	常木『新文法』
32	常木『明快文法』	33	高木『新編文法』
34	信岡『ことば』		

1～12の教科書の中では，顕著な配列が見られるのは4（田中『文法ノート』）と6（田中『ミニ文法』）であろう。前者は，人称代名詞，前置詞，形容詞の後に動詞の現在人称変化(2)（不規則動詞）を置き，定冠詞類を最後の形容詞の比較，接続法の前に置いており，後者は動詞の三基本形，非分離動詞，過去人称変化の後に動詞の現在人称変化(2)（不規則動詞）を置いている。後者と同じように，17（清水『2倍の文法』）も三基本形，過去人称変化の後に現在人称変化(2)（不規則動詞）を置いている。13（森田『実用文法』）は，動詞の現在人称変化(1)と(2)を定動詞後置（従属接続詞）を挟んで置いている。その他は，再帰動詞，非人称動詞，形容詞の比較を前半に置いているか，後半に置いているかの違いが見られる以外は，それほどの違いは見られない。田中『文法ノート』と田中『ミニ文法』は，「簡略化」の試みの中で「規則的変化」を前半に，「不規則的変化」はできるだけ後半に置き，「水を飲もうとしない」学習者が入り口で学習意欲を失わないように工夫したものと解される。清水『2倍の文法』は，本文100ページを超す教科書で「動詞の現在人称変化(2)」を三基本形，過去人称変化の後に置く唯一の教科書である。「ロング・ベストセラー」教科書には，このような特異な配列は見られない。したがって，森田氏が「近ごろ出版される文法教科書は，どうも困る点が多い。……先人たちが苦心惨憺して築いて来た教授用文法体系を，それらは，これでもかこれでもかと言わんばかりに木っ端微塵に砕き尽くしているかのごとく見える」（まえがき）と嘆かれているのは，これらの教科書を指しているのだろうか。

4）「ロング・ベストセラー」教科書の特徴

以上，**1**），**2**），**3**）の考察から，「ロング・ベストセラー」教科書には次のような特徴が見られる。すなわち，平均73ページで，「初級文法教科書」の平均ページ数，1988年76ページ，1990年75ページより少ない。それは，「簡略化され

た」教科書よりもいくらか多く，「重厚な」教科書（100ページ以上）より少ない．文法項目の配列順序については，再帰動詞，非人称動詞，形容詞の比較を前半に置くか，後半に置くかという共通性がある以外は，特異性は見られない．きわめて，オーソドックスである．「ロング・ベストセラー」教科書が「簡略化」や「重厚」な教科書と顕著に異なる点は，各文法項目の説明後に「確認」のため，理解度をチェックするための小「テスト」，小「練習問題」が設けられていることである．1～12の「簡略化された」教科書の中では，8だけが各文法項目後に置いている．13～19の「重厚な」教科書では，19のみが，動詞の人称変化，名詞の性，名詞・冠詞（類）・形容詞の格変化，動詞の三基本形，過去人称変化，完了の助動詞 haben 支配，sein 支配の後に小「練習問題」を置いている．それに対して，「ロング・ベストセラー」教科書では，11冊が各文法項目の説明後に置いているか，前半の動詞の現在人称変化，名詞・冠詞（類）・形容詞の格変化に小「練習問題」を置いており，1冊は特別に設けてはいないが，その課の終わりに設けられた「練習問題」の最初に「チェックテスト」的な問題を置いて工夫しているものがある．3冊は，小「練習問題」は置いていない．

このような特徴は，近年の教養課程におけるドイツ語の単位数，授業時間数の減少，「水を飲みたがらない馬」の増加という現状を顕著に反映したものと思われる．

5　「初級文法教科書」編纂に必要な視点

教科書のあるべき姿について論ずるとき，ドイツ語教育の置かれた現状の十分な認識が根底に据えられていなければならない．

一般教育課程ドイツ語教育の現状については，表1から次のことが明らかとなる．ドイツ語履修（第二外国語として）の必修単位数の調査では，最高10単位（1学部），次いで9単位（9学部），最少3単位（3学部）で，142学部（72.1%）が8単位を1，2年次ないし3年次に履修することになっている．この調査の対象となった49大学の28が国立大学であり，他は私立大学である．これらの大学では，第二外国語が必修となっている．本学では，商学部，法学部とも第二

外国語（ドイツ語，フランス語，スペイン語，中国語）Ⅰ，Ⅱ，英語Ⅴ，Ⅵから4単位を必修選択しなければならないが，必ずしも第二外国語を選択しなければならないようにはなっていない。しかし，以前の自由選択から考えると進歩と言わざるをえない。授業は，週1回90分である。全国には，第二外国語，ドイツ語が自由選択課目になっているところが数少なくないであろう。そこでは，「水を飲みたがらない馬」が増えている傾向の中で，特に大勢のそのような「馬」が見られることであろう。

本稿で取り上げた34冊の教科書は，著者が，自由選択か選択必修か，単位数，授業時間数，学生のレベルを眼中に入れ，工夫，編纂されたものと理解したい。「重厚な」教科書は，選択必修で，授業時間数も比較的多く，次年度で講読の授業または中級ドイツ語が置かれている大学，学部で，学生のレベルも比較的高い学生を念頭に置いて編纂されたものであろう。そのような大学，学部では，「次年次に参考書として十分に役立つ」（森田『実用文法』），「ドイツ語文法を学ぶ時間数の多い学生諸君の一層の理解と習熟のため」，「ドイツ語のいろいろな書物を読む場合に参考にできるもの」，「更に詳細なドイツ語文法が学習できる文法書」（清水『2倍の文法』）が必要とされるであろう。「簡略化された」教科書は，授業時間数の少ない学生を意識したものであり，更に学生の質をも十分考慮に入れて編纂されたものである。田中『文法ノート』は，「水を飲みたがらない馬」の存在と学生のレベルをも十分念頭に入れ，「唐突，飛躍は極力避け……，既に習った文法事項を裏切るようなものは，どんな些細なことでも絶対出さないように細心の注意を払い……，変化表や例文に用いた単語もできるだけ同じものを繰り返し[(9)]」，「原則として学習者には予習，復習（宿題）を課さず，練習問題を含めて全て授業のなかでやるように構成，配分して」（はしがき）編纂されている。その結果，前出の森田氏のように「簡略化」，「ダイジェスト化」の傾向を憂え，「重厚な」教科書の編纂を手掛ける学者も現われる。しかし，ほかならぬ森田氏も「第二外国語としてのドイツ語教育課程に押し寄せてきた，あるいは押しよせつつある嵐のなせる業にその端を発しているものであって，教科書執筆者の負うべき責任ではないかもしれない」（まえがき）と正しく認識されているように，もともと「簡略化」教科書と「重厚な」教科書はその考えにお

いて対立するものではない．そういう意味で，「ロング・ベストセラー」教科書には，自由・必修選択，単位数，授業時間数，学生のレベル等を考慮して，そこに「使い易さ」が見出されるのである．

そのほかに必要な視点は，初級文法の理念をどうとらえるかである．初級文法の教育は，ドイツ語独自の構造を自覚させることにあり，その構造を明確に浮き彫りにするために文法項目をできるだけ整理して少なめにし，語彙も500語程度に絞り込むべきである．

6　おわりに

ドイツ語教育の現状と将来については，独文学会では十分「論点は出尽くしている[(10)]」．単にドイツ語教育の置かれた現状，授業時間数の不足や学生の学力低下を嘆くばかりでなく，制約された教育条件下でできるかぎり効率的かつ学習効果の多い教授法や教材を積極的に考えていくことが必要である．本稿は，そのための研究の一つである．

〔注〕

(1)　神崎　巌「第二外国語の履修方法—早稲田大学教育学部の場合—」日本独文学会ドイツ語教育部会編集発行『ドイツ語教育部会会報』(以下『会報』と略す) 33号，S.18, 1988.

(2)　『会報』での報告を参照．

(3)　本学では，商学部，法学部とも第二外国語（独，仏，西，中）Ⅰ，Ⅱ，英語Ⅳ，Ⅴの中から4単位選択必修となっている．第二外国語を履修しなくてもよい余地が残されている．

(4)　轡田，三島，上田「日本におけるドイツ語教育の状況をめぐって」『会報』30号別冊，1986.

この別冊は，Dietrich Sturm (Hg.) Deutsch als Fremdsprache weltweit. Situation und Tendenzen 1987, Max Hueber Verlag (München), S.75 以下所収の Zur Situation des Deutschunterrichts in Japan の日本語訳である．

(5)　「70ページを超えるものはあまり売れない」という出版社の意見もある．『会報』31号，S.63，1987を参照．

(6) 田中敏「大学におけるドイツ語教育の今日的意義が問われる中，敢えて文法の教科書を書いたその周辺」『会報』29号，S.28，1986.

(7) 同上 S.29.

(8) 同上 S.26，27.

(9) 同上 S.28.

(10) 斧谷彌守一「シンポジウム『ドイツ語教育の将来を考える』を聞いて」『ドイツ文学』81号，日本独文学会編，S.148，1988.